河内千早城古絵図に見る城跡の姿　紙上千早城絵図展

１・まえがき

千早城の戦いは元弘２年１３３２年、後醍醐天皇の倒幕運動に呼応した楠正成が天皇の隠岐島配流後、１３３３年千早城に籠り、幕府軍１００万といわれる大軍が実施した最初期の山城攻めである。千早城は上赤坂城を本城とする楠城塞群の詰城であり、数１００人しか籠れない小規模な山城である。全国に数万もある古城の一つに過ぎない。ただ、自然地形を生かした山奥の山塞であり、大軍が攻めにくい断崖上にあり、戦国時代以降には利用されることのない立地であった。築城は元弘２年１３３２年と伝え、戦国時代の山城のように精緻に尽くされた縄張もなく、現状では土塁も空堀もない、極めて単純な山塞である。しかし、太平記に伝える関東の大軍を前に１００日以上に及ぶ戦いで、ついに鎌倉軍が六波羅探題の陥落により撤退するまで持ちこたえたのである。このことが千早城を一躍、知名度ナンバーワンにした。そこに示された勇猛、快活な物語と小兵で巨大な軍勢を足止めした武勇は『太平記』によって語り継がれた。凡そ城攻めに於いては後詰という支援のない場合は必ず落城の憂き目を見ることになる。千早籠城の間隙を縫い、後醍醐天皇の隠岐脱出、討幕綸旨により、足利尊氏、新田義貞、播磨の赤松、伊予の河野、肥後の菊地氏の蜂起が千早城の実質後詰となった。戦後わずか１２日で鎌倉幕府は滅亡した。今から７００年、あの桶狭間からでも２００年前である。この籠城戦は戦国大名にとっては兵法の見本のように扱われ、江戸時代には楠流兵法として隆盛を極め、戦前は楠正成が軍神として扱われ、楠公築城論や金剛山大要塞説等大要塞説が論じられた。山城としては珍しく昭和９年には国の史跡となっている。このように、太平記以降近代にいたるまであらゆる注目を集めた千早城である。江戸期は多くの軍学者による調査で絵図が残された。豊臣秀吉による調査記録が残ることからもその注目度が計り知れることになる。幕末多くの絵師によって錦絵、絵草子が描かれ、楠正成の武勇伝としてやんやの喝さいを上げる物語として多くの夢を与えた。現在も多くの城郭研究者いな、日本人の勇気を鼓舞する存在である。ここでは、千早城の調査の歴史を絵図によって解析し、その遺構の真偽を検討してみたい。

楠正成の千早城は金剛山麓の峰上にあり、２００ｘ４００ｍの山城である。３方は谷で隔絶され、東側のみ谷をへて金剛山への登山道となる。時代が南北朝であり、戦国時代の城郭のように、城そのものに偽計を凝らしたところはなく、切岸に囲まれた削平地が連続するのみで、現状では土塁も空堀も複雑な虎口の構造も見られない。切岸と削平地のみの典型的な南北朝の山城であり、峻険な地形と位置により、戦国時代以降は使われることもなく、近代の改変があるものの、楠時代を今に伝えている。江戸時代の千早城絵図は大きく分けて金剛山要塞絵図と千早城縄張図に分類される、実際に軍学者が踏査した上で書かれた絵図や、現地を見ずに書かれた単なる写しまで玉石混交である。古城絵図から見た知られざる千早城の解析を進めたい。なお、現在の城跡の本丸等の呼称については、疑問があるが、一応、仮にそれらにより検討を進めたい。

２・金剛山要塞絵図

金剛山を背景として、千早城を詰め城とし、多くの楠の城塞群を鳥瞰図的に眺望した勇壮な絵図である。千早城始め古城については、珍しくほとんど断面図として描かれている。戦国大名たちも調査に訪れたと思われるが、あの籠城戦から２６２年後、「依太閤秀吉公命文禄４年（１５９５年）３月１８日画図　奉行増田右衛門尉長盛」と記録され、伝承されている絵図が多く残されている。明治５年の『河内国千早赤坂古城跡写』（A）木版絵図には同様文章に加えて、「豊太閤城跡取調ノ時、原写本一本ヲ、赤阪村辺二被残置、今其辺ノ住人某所持ス、京都永田司馬太郎ヨリ借得之」「文久二年（１８６２年）壬戌五月三日写之蜷川親胤」「明治５年（１８７２年）壬申春献之於官」「狩野勝川摸」と絵図の履歴について記される。この木版絵図には博覧会事務局、博物局朱印等の朱印があり、後者には定価一銭五厘とある。本図の千早城は削平地と切岸のみで描かれ、寸法が記入される。天保１５年１８４４年の彩色絵図である『金剛山千早城図』（B）には上記文言に加えて、「源本河州城連寺戸長久右衛門之家伝来之什物也」と所蔵者を明記する。「天保十五年甲辰三月写震陵朝倉蔵」とある。城郭断面を削平地と切岸で描くのは同様である。城主、曲輪寸法が描かれるが、原図を同じとしても、絵図の縦横比率等イメージは異なって見える。次に地元の旧家に伝来した『金剛山絵図（絵図名なし)』（C）は１３１ｘ１３４ｃｍの

巨大な彩色絵図であるが、千早城主尾根に３基の空堀があり、四ノ丸を二ノ丸と記されている。曲輪の長さと秘水が描かれる。昭和１１年の詳細な模写絵図である『金剛山楠氏城郭古図』（D）は「原本南河内郡中村神山高橋太郎兵衛氏蔵　依安嶋先生清嘱昭和十一年仲秋素風（朱印）」とあり、写図依頼者、作成者、原蔵者の名前を伝える。本図は本丸、二ノ丸、三ノ丸、秘水の地名を伝え、二ノ丸と三ノ丸の間に空堀を描く、この空堀は後に今の千早城の二ノ丸と三ノ丸の間に元空堀があったと伝承されている。しかし、ここでいうところの三ノ丸は今云うところの四ノ丸であり、この空堀説は大きな間違いであり、ここに空堀は存在しない。この事は本図の別図である『千早城址古図』に於いて実証したい。この誤りは多くの金剛山要塞絵図の解釈違いとして伝えられてきた。明治３１年石版で刊行された『楠公千剣城跡古図』（E）は河州豊田氏所蔵、著者は千早村豊田丑三と伝えるが、描写が粗雑であり、本丸、二ノ丸、三ノ丸の文字以外得るところはない。以上、大型絵図３種、木版絵図１種２枚、石版絵図１種３枚、計５種８枚の金剛山要塞図を紹介した。いずれも秀吉の調査絵図が旧家に伝来し、今日に至った絵図と、改めて調査された絵図が見られる。楠の武勇に裏付けされた勇壮な構図から、金剛山千早城絵図、太平記古戦場図等様々な名称で、絵図、軸、屏風等姿を替えて、湊川神社『河内千早城図』、池田文庫等各地に伝来している。ここでのまとめは現在の四ノ丸という地名が存在せず、三ノ丸であったこと。二ノ丸三ノ丸の間の空堀は存在しないことである。

３．千早城絵図

千早城を踏査したのは４０年以上前であり、縄張調査もしていないため、今回縄張絵図の検証は明治の四ノ丸銅標建設時の測量図「千早城跡之図」、林部與吉楠公築城論「千早城址之図」、古城めぐり１３６回藤崎定久「千早城主要部要図」、村田修三『図説中世城郭事典３』「千早城図」を参考とした。なお、ここでも絵図に於ける曲輪の名称については、仮にいま言われている本丸―四ノ丸を踏襲したが、金剛山要塞絵図では四ノ丸はない。

Ａ・江戸期の軍学者が伝えた一般的な千早城絵図は元陸軍参謀本部所蔵の『城塞繹史』「河内千剣破城」、国立国会図書館『日本古城絵図』畿内の部「千剣破城之図」、浅野文庫『諸国古城之図』「河内千早」として残されている。当文庫には参謀本部中山光久氏寄贈の城塞繹史図の写しがある。これらの絵図には曲輪の回り、外壁に土塁状の太い黒線が描かれる共通点がある。これらは通常、土塁や石垣とされるが、今回は単なる切岸の表示と思われる。三の丸から南に秘水が描かれ、「一夜に五石乾るることなし」とあるが、調査未了であるのか、近年の実測図には記載がない。確認の必要がある。いずれの絵図も曲輪が全体的に丸みを帯びて書かれるのは兵法でいうところの最小の塁壁で最大の兵の収容できるのは丸であるという原理、現在確認されているよりも多くの曲輪が描かれる。

Ｂ・国文学研究資料館の津軽藩『城築規範』「河内千剣破城」、池田家文庫『河内千剣破古城図』は四ノ丸虎口に当時ありえない丸馬出が描かれている。もちろん、当時の城郭に戦国時代のような丸馬出があるわけはなく、江戸時代の築城学の影響により、津軽藩甲州流兵学者貴氏元親が千早城を元に当時の築城学により、こうあるべきと理想を求めた復原図のように理解できる。『城築規範』は全国７２城の古城調査絵図集であり、寛文１２年１６７２年に編纂され、後の古城絵図や兵法家に多くの影響を与えた優れた絵図であるが、現状調査図と理解するには注意が必要となる。

Ｃ・富原文庫本『古城図全』「河内国金剛山城図」、「河内国千破屋城図」がある。全国６７古城の絵図集２冊である、伝来は異なるが、内容は同一であり、希少な絵図が含まれる。千早城絵図は金剛山城と千破屋城に分れるが、作者は同一の城跡と理解していないが、金剛山城図は千早城全体を、千破屋城図は主郭を中心に描かれ、一応全体を含んでいる。何れも千早城絵図である。これらは現地を踏査せず、伝来の過程で混同したものと思われる。

Ｄ・『千早城址古図』「原本千早村前田氏蔵、依安嶋先生清嘱昭和１１年仲秋、素風（朱印）」とされる千早城の見事な断面図がある。原本には『千早之城えづ』とあり、先に紹介した『金剛山城郭要塞古図』とセットになり伝来している。この絵図は現地調査されて記録された絵図が基になっている。江戸期の千早城の詳細な記録といえる。断面図であるために、その平面構成を伺うことは出来ないが、千早城の東西南北の比高、城根の大回り、

谷広さ寸法が記入され、断面に各郭の長さと高さが記入される。なお、本絵図では三ノ丸と四ノ丸の間に空堀のように見える部分があるが、ここでいう四ノ丸は三ノ丸である事、絵図は今三ノ丸といわれる曲輪から、主ルートを外れ、西の尾根の曲輪群を描いている。此の尾根が下るところに、四ノ丸の尾根を続けたために、あたかも今の二ノ丸と三ノ丸の間に空堀があるように見える。呼称の違いと断面図の尾根が今と違い三ノ丸西尾根を描いたために本城空堀説が生まれたのである。本丸の北側に高さ３間の土塁が見られるが、他の絵図には見られないため、本丸に描かれる三基の祠建築時の遺構かとも考えられるが検討が必要となる。

Ｅ・『千破剣之図』内題『千剣破城址之図』江戸中期における細密な現地調査絵図である。本丸に楠十二社霊神祠、二ノ丸に霊神拝殿、四ノ丸と下方の郭に礎石が描かれる。四ノ丸本丸側に二間の堀切を表示する。これは従来言われている空堀とは場所を異にする、新知見である。削平地の形状、曲輪間の繋がり、切岸の状況、高さが描かれる。礎石が夫々５個表示される等現地を見ないと描けない絵図である。曲輪の名称も本丸等とせず、１－１０の番号で表示ある。これは呼称が明確でない場合の研究者の推定に依らない表示として今に通じる学問的姿勢である。本図は今後城跡調査の基本図と位置付けられる。５３ｘ７６ｃｍ、残念ながら作者や年代は記入されていない。類似の絵図は全国的に見られない。

Ｆ・『楠正成籠千破剣城図』・『同内容の無題の城絵図』１－８番と記された８段の曲輪と付属の曲輪５個からなり、何れの曲輪にも南北の間数が記入される。１番に「此所ハ宮ノ有之所ヨリハ低シ」、２番に３基の社、７番に「ホリ切」これは四ノ丸南、本丸側の堀切。図形全体は東西に長く、南北に狭い舌状の地形を包丁で切ったような南北に長い曲輪が続く形状であり、曲輪間の段差を記入せず、ただ、３番から「此の段より大手まで次第にヒキリ」と記入されるのみ。７番に「是ヨリ二十間計下二秘水ノ井在」と秘水が井戸であることを明示している。後者は城郭部のみ表示するも、前者は周辺情報を記入する。城郭の形状には違和感があり、雅節であるが、記入さている情報は正確といえる。

Ｇ・『河州千剣破城之図楠正成縄張』同一名称の絵図が２枚あり、前者は「文化十年十月写之重庸」、後者は「文化十二年二月二十三日写之」とされ、前者が白黒、後者が彩色であるが原図を同じくする絵図である。特長的には現在府道によって破壊されている南山裾部分に曲輪があり、城中に４か所の水源、４か所に櫓、各所に枡形、喰い違い虎口、馬出状曲輪、横矢等が見られ、とても南北朝期の城郭と思えないところである。金剛山側の尾根にも「大切岸高サ四十間程」と記される。正成が尾根を加工したことは想定されるが、全般的にやはり、戦国時代の技術を理解した兵法家が千早城をモデルに創作したかのように思える。

Ｈ・『河州千剣破城之図』「天明八戊申年八月八日到河州而尋旧蹟之時、従山之麓遙眺望之耳高山峻岨而容易不能登、小幡内蔵平信厚」１７８８年の踏査記録である。小幡信厚が甲州流の兵学者小幡景憲の末裔かは、確認できないが、１－９番の付番の付け方、３番と３番下に２重櫓を２基想定、枡形、北崖下の丸馬出、南崖下の稜堡城郭のような遺構と千早城をベースにした築城想定図としか考えられない。

Ｉ・「千破屋城墟図」『日本外史字類大全古戦場槩図全』に収録される明治１４年尾銅版地図であり多く流布されている。鳥瞰図であり、６段の曲輪と主要部の大きさのみ描く。

Ｊ・『千早城跡之図』千早神社が鎮座する１郭以下２５の削平地を描く。四ノ丸に銅標建設地とあり、その際の測量図と思われる。曲輪の形状、つながりが正確に把握されており、明治期と思われる測量図として、千早城研究の基礎資料となる。Ｅの江戸期の調査絵図と比較すると、本丸周辺の調査が細密である。四ノ丸周辺はすでに改変したか、詳細不明である。

４・あとがき

１５種２４枚と大量の千早城絵図を検証してきた。従来千早城絵図は数種しか知られておらず、架空の産物として調査の対象とされてこなかった。これは始めて真面目に古城絵図と対峙した報告となる。大阪の南に位置する金剛山は大阪人にとってはあこがれの山である。金剛山は楠正成の活躍で、大阪魂を鼓舞させ、その栄華と遺構を今に伝えているが、多くの改変があり、今後に課題が残されている。まず、城郭全体の詳細な実測図により、曲輪の全体像が解明されねばならない、これまでの調査は全容を解明したとは言えない。今回初めて千早城絵図

群を紙上で公開し、多くの新発見と疑問が提示された。千早城研究の賽は投げられた。関係者の奮起を願いたい。